

思いやりの連鎖

北海道 桔梗中学校 2年 松谷 大夢

「校長先生が呼んでいるので、校長室へ行きなさい。」

昼休み、突然担任の先生に呼び止められた僕は、なにごとが起きたのかと目を白黒させていた。いっしょに遊んでいた友人からも、「なにかやらかしたのか」と心配されるほどだった。

確かに僕は、品行方正な人間ではないかもしれない。しかし、校長先生に呼び出されるような悪いことはしていないはずだ。そう自問自答しながら、校長室へと向かった。

「傘を貸したのは君かい？」

そう聞かれ、肩の力が抜けた。

数日前は大雨だった。夕方から急に降り出した雨に、傘を持ってきている人も多くはなかった。

いっしょに帰っていた友人と別れ、一人で歩いていると、目の前に、腰を曲げ、重そうなカートを押している、ずぶぬれのおばあさんがいた。

僕は家まで走ればもうすぐ。そう思いつつ、自分のさしていた傘をおばあさんに渡した。

帰宅すると母に叱られた。「雨が降っているのに持っていった傘を忘れてくるなんて」と。正直に言えない恥ずかしさがあった。

校長室を後にした僕はクラスに戻ったが、なんの話だったのか聞いてくる友人たちにも話をごまかしながら席についた。おばあさんなのかそれを見ていた人なのか、学校にお礼の電話をくれたそう。その後、担任の先生から話を聞いた母からも、めいっぱい褒められた。正直に言えば無駄に叱られることはなかったのにと。思いやりは連鎖するのだと。

思いやりの気持ちを相手に態度や言葉で表すことは、簡単そうにみえて意外と難しい。

身近な人になればなるだけ、それが素直にできなかつたりする。それがみんなあたりまえにできるようになれば、世の中は変わるのではないだろうか。やさしくされると気分もいい、やさしくしてくれた人にも周りの人にも、やさしくなれる。怒りも減って丸く収まりそうなものだが。思いやりの連鎖は待っていても始まらない。そのときのことがきっかけで僕は堂々と思いやりを相手に向けていこうと思った。

品行方正とまでは言われないうしろ、最低限のあいさつだったり、思いやりの行動ができる子でいてほしいと、父と母は願っているといつも話している。

僕には叱ってくれる家族がいて、近所や町内会などの交流もある。

非行や犯罪が、僕を引きずり込もうとしてもそこから救い出してくれる手があるのだと思わされる。なにをしても誰も見てくれなかつたり、声もかけられない、暗い負の連鎖はなににもよいことを生まないと思う。

明るい正の連鎖をつなげていけるように心がけて生活していこう。非行や犯罪で傷つく人が世の中から一人でも減らせるように。